ＴＯＫＹＯ美人と、東京１００ストーリー

婚約者は刑事①

５回連載（００４　世田谷・岡本）

穂高健一

井伊佳元が豪邸の表札を見ていた。門柱の上には、春の陽ざしをあびる三毛猫が横たわる。こちらをバカにしたように、大きな欠伸をした。

かれは腹立たしくなった。怒りはその猫ばかりでなく、布施和香奈にもむけられていた。井伊はもう2時間も、彼女の住まいを探しつづけているのだ。

世田谷・岡本一丁目は豪邸がつづく、高級住宅地だった。まわりの庭木からは、多種の野鳥のさえずりが聞こえてくる。ひときわ閑静なところだ。

高級マンションのほとんどが、オートロック式の玄関で、一歩もなかに入れない。外部からだと、住人の名まえすらも確認できない。布施和香奈の住まいを探しあぐねる井伊は、だんだん腹立つ自分を知った。

「なにも好んで、うちの店で、超高級アールスメロンを買うことはないだろう。それも、3度もだ。迷惑なはなしだ」

グレーのコートを着た井伊は、内ポケットから、黒い手帳を取りだした。一枚のコピーが挟まれていた。

それはセーフティー池袋店の投書箱に入っていた、一通の『お客様の声』だった。投書の日付は2月29日。この投書を最初に読んだとき、じつに申し訳なく、謝罪したい気持ちがいっぱいだった。

『池袋西口の、東京芸術劇場からの帰り道、セーフティーで一個1万５５００円のアールスメロンを買いました。3回買いましたが、3回とも腐ったり、傷んだりしていました。最初は、わたしの誕生パーティーで、メロンを使おうとしたところ、完熟しすぎて使えませんでした。

２度目は親友の病気見舞いに差し上げましたところ、退院後、あのアールスメロンは腐っていたわよ、といわれて恥をかきました。

３度目の正直という気持ちから、実家の父にメロンをプレゼントしたところ、中身がドロドロに傷んでいたそうです。実家の父は呆れていました。なぜ、こうも腐った果物を売るのですか。信じられません』

投書はきれいな文字で、丁寧に書かれていた。「布施和香奈」という名前はしっかり書かれ、ルビもふられていた。それなのに住所はなぜか世田谷区岡本１丁目のみ。そのうえ、電話番号すらも書かれていなかったのだ。

商品クレームの場合は返金とか、代替品を自宅に届けるとか、それなりの手を打つ。しかし、住所が不正確では対応ができない。謝罪もできない。この女性はなぜ正確に書いてくれなかったのか。他方で、池袋には西武、三越、東武などのデパートがひしめくのに、なぜセーフティーで、超高価なアールスメロンを買ったのだろう、とかれは妙に不可解な気持ちにさせられていた。

スーパーで売られているアールスメロンは、通常１個が２５００円前後。しかし、セーフティー池袋店の場合は通常価格のアールスメロンのほかに、鬼頭統括部長の指図で、桁違いに高価な、１万円台の超高級な商品を陳列している。２５００円の真横に、１万５５００円のアールスメロンをならべても、売れるはずがない。しかしながら、それを3回も立てつづけに買った、というお客がいた。それが布施和香奈だった。

手にする『お客様の声』コピーで、気になる疑問点がいくつかあった。

一個１万５５００円もするアールスメロンが腐っていれば、一度で懲りて買わないか、その時点で苦情をいうはず。３度目にはじめて苦情をいうとは、たとえ金持ちでも、考えられない。

高級アールスメロンの金色タグには、金額のほかに『何日頃が食べごろ』の表示がある。ある意味で、それは賞味期限に該当する。売場担当者は日々にチェックしているはずだ。しかし、長期に売れないものとか、賞味期限の長いものとかは、注意力が散漫になり、見逃しやすい。人間の盲点のひとつだろう。

他方で、お客は買う段になれば、メロンを手にして日付を確認するはず。そのうえ、サービスカウンターでは、レジチーフなどの担当が化粧ケースに箱詰めするので、そこでもチェックされる。

３段階のチェックがあるのに、同一のお客に3度も連続して不良品が渡るだろうか。

（これには、なにか裏がある？）
そんなことを反芻したり、検証したり、あれこれ推量したりしていた。
3月初めの日陰では、街なかを吹き通る風がまだ冷たい。寒さが全身に染み入る。陽だまりとなると、ほっと助かる。
『実家の父は呆れていました』という文面から判断すれば、布施和香奈は嫁いでいるか、独り身でも親と離れて暮らしているかだろう。
（布施家は、はたして見つけだせるのか？）
井伊が最初に立ち寄った交番では、岡本一丁目のみだと、住所があまりにも不明瞭だといい、頭から相手にしてくれなかった。
先刻は別の交番に立ち寄ってみた。
年配の警官が親切にも住宅地図を広げ、布施という苗字からあたってみてくれた。だが、見当たらなかった。通行人に訊いてみたが、まったく無意味だった。
（なにか巧い方法はないものか？）
廃品回収車がくれば、そのスピーカーを借りて、『布施和香奈さんを探しています、心当たりの方はお申し出ください。些少のお礼はいたします』と連呼したいくらいだ。連呼された女性はきっと怒るだろうな。

（鬼頭は布施さまが見つかるまで、店に帰るな、という。ここは背に腹は変えられない。廃品回収者の運転手に袖の下を渡して、やってみるかな？）
それらしき小型トラックは現れず、これはアイデア倒れだった。
まわりの広い屋敷から梅の香り、沈丁花の香りが漂い、鼻腔を刺激する。井伊は豊かな気持ちになれなかった。
門柱に猫が横たわる場所に戻ってきた。三毛猫はまたしても大きな口を開け、欠伸をしている。ますますバカにされた気分だった。
（朝っぱらから、鬼頭が池袋店にやってくるし、投書が見つかってしまうし……。きょうは日が悪いのか、運が悪い）
かれはくり返し、不運をなげいた。背後から、突如としてクラクションが鳴った。かれはとっさに道路の中央から路肩に身をよけた。30代後半の女性が運転するベンツだった。
井伊は横目で、帽子を被った運転席の女をにらみつけた。皮製の前ひさしの付いた『カスケット』帽子で、どこか売れっ子の芸術家タイプだった。
（布施和香奈はこの手の女かな）
ベンツが道幅の狭いところをゆっくり通り抜けていく。
かれは右手に折れてみた。文化財の、威厳に満ちた武家屋敷があった。元岡山藩池田家の筆頭家老だった、伊木家の下屋敷の表門である。案内板を読んでみた。歴史好きな井伊だけに、すべての文面がかれの脳裏に刻み込まれていく。いまは好きな歴史に

関わっていられない。
井伊はまたしても徒労を意識しながら、武家屋敷の先を右に、左にと折れ曲がった。
「金持ちが多いな。下町とはちがうな」
かれは、しゃれた建物の前で立ち止まった。塀越しにのぞき見ると、花壇には春の花が咲く。家人からふいに、１１０番しますよ、と怒り顔がむけられた。岡本１丁目の界わいを何度も行き来すれば、住民に怪しまれても当然だろう。

「空き巣の下見じゃないんだ」
井伊はムシャクシャしながら、一言、不快に吐き棄てた。
かれはその先で、おなじ場所で、おなじ表札をみている自分に気づいた。ウンザリした。その一方で、今朝の出社後の、一連の状況を思い浮かべた。
開店前の店内は、社員、パート、アルバイトたちが商品の陳列で最も忙しい光景となる。だれもが品物を運んだり、ケースに詰め込んだりしている。
井伊は店長業務のひとつとして、投書箱の施錠を外し、『お客様の声』を取りだした。きのう3月1日は店長会議で、池袋店には立ち寄っておらず、2日間分の投書がたまっていた。
池袋店はほかの店舗に比べ、ことのほか投書が多いことでも有名だ。……接客が悪いだの、駐輪場の整理ができていないだの、品揃えが悪いだの、サービスコピー機がいつも故障しているだの、レジが金額を打ち違えても謝らなかっただの、数限りなく苦情が寄せられる。
こちらの対応の悪さもあるが、お客の身勝手な要求とか、腹が立つ内容のほうがはるかに多い。それらが改善されないとなると、店長への誹謗中傷となるのが常だ。
井伊はかつて投書箱を靴売場の陰の、目立たない場所に移した。投書が激減した。喜んでいたところ、社内監査で、『投書箱はもっと来店客の目につく場所に移動し、お客さまの声を店舗の運営に反映させるべきだ』と指摘されてしまったのだ。正面玄関の横に戻したとたんに、またしても投書が増えた、という経緯がある。
一通り投書を読み終えた井伊は、青果売場にむかった。青果担当チーフは大柄な男で、雑な手つきで平台にイチゴを陳列していた。
「アールスメロンの苦情だ。これを読んでみな」
「……えっ、1万５５００円もするアールスメロンを、この店で3個も買った人がいたんですか」
「らしいな。いま売場には？」
かれの視線が果物ケースの方にむけられた。
「見てのとおり、ゼロです。週に一度しか発注していませんから。……この投書の女、ほんとうに金を出して買ったのかな？」
「念のために、ＰＯＳの販売実績で確認してみな」

「いまですか。調べなくても、どうせ万引きですよ」
「もしかして、売れているかもしれない」
「開店準備で、忙しいんですから、いまは」
青果チーフはクセが強い社員で、店長の指示を聞こうとしない。だから、この社員は池袋店に送り込まれてきたのだ。
「じゃ、おれが調べる」
店長が朝早くから部下を叱れば、当人は一日じゅう気分が悪いだろう。そんな配慮から、井伊は自分の怒りを抑え、バックヤードのＰＯＳ室に入った。
高級アールスメロンの単品コードから、販売実績を確認してみた。２月29日と、同月24日と一個ずつ販売されていた。
（値引きなしで、２個とも売れている。この店にも、奇特なお客がくるものだ）
１月実績となると、データが古いので、店舗から呼びだせない。本社の情報管理部への問い合わせになってしまう。２月は２個売れている。それだけで充分だと思った。
背後のドアが開いた。ふり向いてみると、鬼頭統括部長だった。
「開店まえの忙しいときに、パソコンのまえで腰を下ろして、なにしてるんだ？」

こんな朝一番から、店舗巡回か。ふいを衝かれた井伊は、言い表しがたい不快感をおぼえた。パソコンの情報画面を消した。ここで布施和香奈の投書をみられたら、厄介なことになる。パイプ椅子から立ち上がる井伊は、数枚の『お客様の声』をそれとなく『品揃えチェック一覧表』のバインダーに挟んで閉じた。
「しごとには優先順位があるだろう。店長として開店前には、チラシ商品のチェックとか、売込み商品の陳列状況とか、レジの稼動チェックとか、もっとやるべきことがあるはずだ」
鬼頭の厳つい顔には不機嫌な表情が浮かんでいた。
「まあ、そうですけど、ちょっと嫌なことがありまして」
「なんだ？」
「青果売場から、１万５５００円のアールスメロンが立て続けに消えているので、また万引きかと思い、販売実績を見にきたんです。でも、止めます」
井伊はすでにＰＯＳデータで確認ずみだが、あえてそれを伏せていた。
「問題発言だ。なぜ万引きだと決めつける？　売れているかもしれない。それとも、私の営業方針への当てつけ発言か」
鬼頭の持論は高級品志向だった。池袋のお客はデパートを利用しており、買物の目が肥えている。スーパーといえども高級な品物を置いていないと見劣りがする、というものだった。昨年から、売場の一角に、『パン工房』という、ベーカリー部門を設置した。手作りパンは人気を得た。いまや、店全体の集客にも寄与してい

る。
　これが鬼頭統括部長を調子に乗せてしまったのだ。さらなる高級品志向で、夕張の超高級アールスメロン、下関のトラフグの刺身、松坂牛の霜降り肉、京都の高級漬物などの販売に踏み切ったのだ。
　しかし、これら高額品はまともに売れたためしがない。半額にしても、それでも割高で売れ残る。入荷しても大半が廃棄処分か、万引きされるか、どちらかだった。
「先週も、５千円台のカニ缶が４個もそっくり万引きされました。それだけで、２万円の被害です」
「井伊店長の話しを聞いていると、高額品がこの店で売れない、という先入観が強すぎる。だから、店全体の販売意識が低くなり、高級品の売り方の工夫が足りなくなるのだ。デパートで売れている品物が、スーパーで売れないはずがない」
「デパートとは棲み分けだと思っています。売れないものは売れません」
　井伊は迎合しない態度だった。
「店内を明るく清潔で、買いやすくすれば、高級品でも、かならず適正な値段で売れる。それに好い接客と、売るぞという信念だ。

それに気力と気迫、これらが販売を推し進めてくれる」
「精神論じゃ、物は売れません。来店する客層がもともとちがいますから」
「おなじ人間だ。来店したお客さまには、従業員の真心が伝わるものだ」
「老朽化した店はいくら磨いても、新品になりませんからね。冷凍ケースの焼付け塗装は剥げているし、什器は傾いているし、売場の床は波打って凹凸がひどい。超高級アールスメロンなんて、不似合いです」
「悪い点ばかり見ている。井伊店長はなにかにつけて、マイナス発想だ」
「それでも、後方の作業場の衛生管理には努めています。店長として目を光らせ、うるさく言ってきています。店内で作る惣菜などはとくに。それでも、売上げ作りには限度があります、老朽化の器具では」
「泣き言か」
「笑いごとでもないでしょ。店長会議では、池袋店はいつも利益率が問われています。廃棄ロスを説明しようものなら、途中で話は打ち切られ、結果がすべてだ、といわれるし」
「この店には、収益率を改善する余地が多分にある。店長の発想力と努力だ」
「最大の効果は、まず廃棄ロスを減らす。超高額メロンなんて、瀬戸物のレプリカでいいんじゃないですか。腐らないし」

「スーパーの売場で、レプリカを置いてどうする。飲食店と違うんだ。店長がそういう発想をしているから、売場が貧相で、見劣りがするんだ」
鬼頭の目がつり上がった。
「下関のトラフグの刺身、松坂牛の霜降り肉など、売れ筋にはなりません。見せ筋どころか、棄て筋だ」
「キミの考えはすべて後ろ向きだ。店長がそれだと、部下はますます高級品を売る気がなくなる」
「だから、鬼頭部長はつね日頃、店長の適正に欠けると、社長に進言している。適正な良い進言だと、いつも感心しています」
「先回りして言うな」
店内のＢＧＭが変わった。開店まで、あと20分。この時間帯は10分ごとに音楽が変わり、時計を見なくても、時間がわかるシステムだ。
「朝の店長業務がどこまでできているか、確認する。そのバインダーを見せてもらおう」
鬼頭の指先が、『品揃えチェック一覧表』に向けられた。まずい、と井伊は身構えた。
「これから使いますので」
「いまから開店前チェックか。いまさらバタバタ取り繕っても、ダメだ。私の目は節穴じゃない」
鬼頭がイヤらしい笑いを浮かべた。
「竹のように、節目がゴツゴツした、いい目だと思ってます」
「キミはお世辞が上手じゃない。むしろ、貶されている気分だ。バインダーを寄越したまえ」
鬼頭がムキになった。井伊はやむを得ず手渡した。
「うむ。この『お客様の声』は？」
「メロンの投書ですか。きっと万引き女ですよ。超高級アームスメロンを盗ったものの、腐っていたから、腹いせに投書した。そうに決まっています」
「ウソをついていたな。青果売場から、１万５５００円のアールスメロンが立て続けに消えていたから、ＰＯＳの販売実績を見にきた、といった。その実、この投書が気になり、売上げを確かめにきた。そうだろう」
「正解です」
「ごまかして、正解か。これには私も強い関心がある。売上げ実績を調べてみたまえ」
「データは過去の出来事です。いまは一番忙しい時間帯、過去をふり返らず、一歩先を見つめて行動する。あとで、調べておきます」
「あやしいぞ。井伊店長はすでにデータを調べている？　苦しい言い訳に思える。メロンは万引きでなく、販売されていた。そうだろう。正価か、見切り品か、それを知りたい」
観念した井伊はＰＯＳ画面を開いた。鬼頭が背後からかぶさる

ように、覗き込んできた。
「これは奇跡です。２月に２度も売れている」
「ともに１万５５００円だ。値引きなしの正価で、買っていただいている」
鬼頭は感慨の口調だった。
「この際、鬼頭部長の目で、高級品がどのくらい廃棄ロスが出ているか、確認してみたらいかがですか。トラフグの刺身、松坂牛の霜降り肉はぞっとするくらい、廃棄が出ています。環境保全団体から抗議がくるくらい」
それは単なる逃げでなく、それらがいかに無益、無意味な販売であるかと、鬼頭に認識させたい気持ちがあった。
「その必要はない。布施和香奈さまのクレーム処理は、なにをさておいても最優先だ。いますぐ謝罪に出むけ」
「ムリじゃないですか。この住所だ、と」
「草の根を分けてでも、布施さまを探しだし、謝罪するのだ。セーフティーで、３度も１万５５００円のアールスメロンを買ってくださった上客だ」
「……世田谷区岡本には、何千人もの住人がいるはずです。ムリですよ」
「布施、という苗字の住人は岡本一丁目に多くても５、６軒ていど。そういう前向きの発想で捉えるべきだ。井伊店長は何かにつけて後ろ向きの考えだ。布施和香奈とルビまでふって、読めるようにしてくれている。これは謝りにきて欲しい、というメッセージだ」

「謝罪が欲しければ、電話の一本もかけて寄越しますよ。自宅まで来てほしくないから、住所ははっきり書かない。電話も書かない」
「徹底して探しだせ。業務命令だ」
「開店が一段落したら、出かけます」
「なにごとも早いほうが良い。今すぐ即時だ。私が店長を代行しておく。謝罪ができるまで、店に帰ってこなくてもいい」
「代替のアールスメロンはどうしますか？　現物は店にないし」
「週に２個も売れる、売れ筋を欠品させているのか」
「ない袖は振れない。レプリカでも、買って行きますか」
「レプリカだって。本気じゃないだろうな。デパートで最上級品のアールスメロンを買ってきて、こちらの包装紙に包んで、届けたらいい」
「詐欺商法だ」
「誠意だ。商品がなければ、デパートで買ってきてまでも届ける。これは誠意以外のなにものでもない」
鬼頭はどこまでも真顔だった。
「それなら三越か、西武か、デパートのラッピングのほうが誠意は伝わります。今度は、デパート並みに、新鮮な高級品を置いて

おきますからといって。それはウソっぽいかな」
「取扱う商品に、愛着をもてない店長は最低だ。こんな店長をクビにしない、松平会長の神経を疑ってしまう」
「むしろ、４万６５００円の返金をして。それにプラス、お詫びとしてタオルの一つでも、持っていきますか」
「タオル一本だって、けち臭い男だ。立食いソバ屋のクレームとはちがうんだ。返金のほかに、謝罪として、セーフティー商品券を包んでいけ。それなら、この池袋店をまた利用してくれる。池袋にお越しの節は、これに懲りずに、ご利用ください、といって手渡す」

「店の経費がまた増える」
「本気で謝罪する気があるのか。これ以上、私を怒らせると、一週間の自宅謹慎だ。布施さまの謝罪ができるまで、ぜったい店に帰ってくるな」
鬼頭の顔が真っ赤になった。
ここは引き際だと思い、井伊はレジチーフに商品券を用意させてから、店を出てきた。世田谷・岡本一丁目に着いたのが11時前だった。それから、もう2時間が経っている。
鬼頭からケイタイに電話が入ってきた。布施さまの住居は見つかったか、という内容だった。今度ばかりは、井伊店長は懲りただろう、という鬼頭のあざ笑う態度が見え隠れしていた。むしゃくしゃ腹立たしかった。
井伊は意地でも探しだしてやるぞ、という気持ちで、電話を切った。
パトカーが狭い道を徐行で通り過ぎていく。2人の警官が車窓越しにこちらを見ている。怪しげな奴だ。そんな視線に思えた。なにか嫌な感じだった。
（布施和香奈と関わることで、なにかしら事件に巻き込まれるのではないか）
井伊は得体の知れない予感と、もやもやとを感じていた。他方で、ある疑問がわきあがり、ふたたびコピーを取り出した。
「アールスメロンの一つはうるう年の2月29日に売れている。『お客様の声』の投書日は2月29日だ。これは辻褄が合わない。布施和香奈はうちの店で買った、その場で、食べていないのに投書したのだ。まちがいない」

かれはそう確信をもった。……世田谷住まいの彼女は、実父にメロンをプレゼントした。父親が仮にすぐ食べたにしろ、腐っていたからといい、彼女がその日のうちに世田谷から投書にやってくるはずがない。もし、店にきたとすれば、店長を呼びだし、3度目も腐っていたと抗議するはずだ。これは住居表示を暗示して

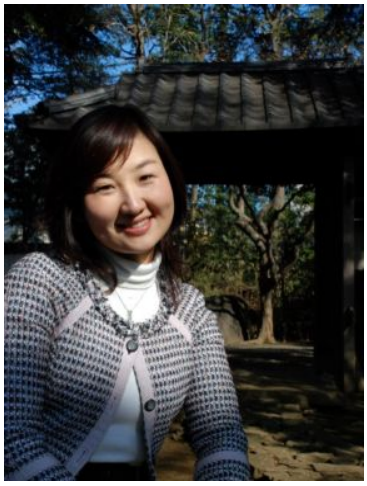
いる。
「推理好きの女性ならば、やりかねない。……世田谷区岡本1丁目2番29号だ」
井伊は周囲の住居表示板を見ながら、そちらに足を運びはじめた。
細い道は曲がりくねるが、どの方角も閑静な宅地つづき。資産価値は数億円、十数億の建物ばかり。そのなかでも、ひときわ広い宅地が該当する番地だった。布施家ではなかった。表札は『鷹野三郎』だった。
生垣からのぞき見た敷地は300坪以上もありそうだ。庭には砂利が敷かれ、踏み石が延びている。鬱蒼とした庭樹や竹林の木漏れ日が射す。春の花が洩れた陽ざしを浴びて咲く。奥まったところには古風な建物があった。ふたたび表札を見てみた。井伊は門構えに圧倒される自分を知った。
「ここは当たって砕けろだ」
かれは門ベルを鳴らした。年配女性の声がインターホーンから聞こえてきた。
「布施和香奈さんは、こちらの家とは関係ありませんか」
「おたくさまは、どちらさまですか？」
「セーフティー池袋店の店長で、井伊佳元といいます」
「ちょっと違いますね。お嬢さまから聞いている、お名前とは？」
「どんなふうに聞いていますか」
「いい加減さん、と」
「それはきっと私のことです。アールスメロンでご迷惑をおかけして、謝罪にきたんですが、ご在宅ですか」
「いま、そちらに参ります」
2、3分待たされた。奥屋敷から、花壇沿いの踏み石からやってきたのは、お手伝いさんらしい50歳代の女性だった。井伊は名刺をさしむけた。
「これって、いい加減って、よめますわよね」
「よく間違えられます。布施和香奈さんに、お目にかかって、お詫びしたいのですが……」
「お嬢さまは、近くのマンションに住まわれています。きょうは銀座の画廊にお勤めかしら？　それとも家にいるのかしら？　連絡を取ってみますね」
彼女はその場で、ケイタイ電話をかけた。かんたんなやり取りだった。
「お勤めの画廊がお休みで、在宅でした。お嬢さまのマンションは、場所が奥まってちょっとわかり難いところにあります。武家屋敷をご存知でしょうか、そちらで、お待ちしているそうです」
「元岡山藩池田家の筆頭家老だった、伊木家の下屋敷ですね」

井伊が正確な口調でそういった。
お手伝いさんはうなずいた。
「ところで、表札の鷹野三郎さんと、布施和香奈さんとの関係は？」
「実の父娘です。こちらは3代にわたって、女系家族なんです。和香奈さんは二人姉妹です。お姉さまが鷹野さんの姓を継ぎ、妹の和香奈さんが、婿養子にきた、お父さまの苗字を継いでいます」
「そういうことですか」
井伊が武家屋敷に足をはこぶと、30歳前の女性が立つ。布施和香奈だとすぐにわかった。彼女のほうから品の良い会釈をしてきた。

井伊はまず名刺を渡してから、不良品のアールスメロンの謝罪を述べた。
「あの投書はウソです。メロンは腐っていません。三つともとても美味しかったです」
「いやな予感がしてきたな」
かれは呟くようにいった。
「アールスメロンはヘソのところを押せば、硬いか柔らかいか、それでなかの状態が判るでしょ」
「よくご存知だ」
「それにタグには、食べごろが書かれていましたし」
「なぜ、ウソの投書を？」
「セーフティー池袋店の店長は、裏稼業をお持ちだ、と聞いています」
「事実じゃない。単なるデマだ」
井伊には、かつて真鍋美紀から【新妻の悩み】を持ちかけられて、彼女の離婚騒ぎを解決させた。あの真鍋美紀からのロコミかな？　と思った。こうした裏情報が出回ると、なにかと厄介な状況に取り付かれてしまう、とかれは危惧した。
「お店に直接、お話を持っていっては、本業の陰のお仕事だから、相談に乗ってくれない。手の混んだ、カムフラージュで呼び出さないと請け負ってもらえない、と教わりました……」
「そんなうわさになっているのか」
「いい加減さんはシャープで、切れ者。悩み事は一刀両断に解決してくれる、と聞いています。私は婚約を解消したいんです。相談にのってください」
「ボクは裏稼業とまったく無縁の人間です。若い女性の悩みを聞いて、舞い上がる歳じゃないし」
かれは突き放す口調でいった。
「わたしの婚約者は溝口幸一といいます。2歳年上の30歳で、警視庁の刑事なんです。結婚式の当日になって、2度もすっぽぬかしたんです」

彼女は婚約破棄への道筋を打ち明けはじめた。
（婚約者は刑事なのか）
警察捜査は秘密事項だとはいえ、ふたりのデートのとき、刑事の口からはいま追っている生々しい事件なども、少なからず話題に出てきたことだろう。彼女はごく自然に推理好きになり、投書の『お客様の声』の住所に謎めいた、うるう年の番地を加えたのだろうか。それはあながち的外れではない、と井伊は思った。
「アールスメロンが腐ってないとなると、これで失礼します。結婚式をドタキャンする男とは、さっさと婚約を解消すれば良い」
「相談にのっていただけないのですね。ウソの投書で、ご迷惑をおかけしました。お詫びとして、セーフティーのＨＰ（ホームページ）に、『投書はウソでした。アールスメロンはデパート以上の味でした。池袋店の店長さんが謝罪に来てくださり、ご迷惑をおかけました』と書き込ませていただきます」
「それは困る。止めて欲しい」
「東京芸術劇場に行くたびに、今後ともセーフティーでアールスメロンとか、霜降り肉を買わせていただきます。それもお約束事として、書き加えてさせていただきます」
「それだけは止めて欲しい。つけ上がる人物がいるから」
井伊の脳裏には、勝ち誇った鬼頭の笑顔が浮かんだ。
鬼頭はきっと店長会議などで、品質の良いアールスメロンはお客の心にとどくものだといい、自慢げに語るだろう。そのうえで、池袋店長がいかに無能か、と強烈に批判してくるはずだ。
「店長さんの裏稼業がデマとも知らず、お店にご迷惑をおかけしました、と真意を書かせていただきますから」
「真実はときに人を不幸にする」
「わたしの気持ちです」
「腐ったアールスメロンでしたが、対応は良かった。そう書き込んでもらいたいな」
「もうウソなど、つきたくはありません。投書から３日間、良心の呵責に苦しんでいましたと、書いておきます」
「わかった。ＨＰにはいっさい書き込みをしない。その条件なら、あなたの話を聞こう。聞（ひ）くだけだよ」
「ここでは他人の目があります。実家のほうで、どうですか。茶室もありますし。歩いて、ものの３分です」
彼女は近道を教えた。井伊は肩を並べる、布施和香奈の横顔をみた。彼女のそばにいるだけでも、心が豊かになれるような、雰

囲気があった。
「実家はここです。どうぞお入りください」
彼女は門扉を開けた。
「豪勢な、風景画のような広い庭だ。すごいお屋敷だな」
「わたしは生まれ育った家ですから、感動はありません。子どもの頃は広すぎで、幽霊が出てきそうで、怖がっていました。いまでも多少トラウマです。わたし弱虫なんです」
まさに、気が弱くて、やさしい。そんな女性に思えた。



「婚約者は、ほんとうに結婚式を二度ともドタキャンした?」
「はい。二度とも、挙式の時間になっても、かれは来ませんでした。最初の披露宴には２３０人の参列者がいらしていました。2度目はその半分以下の参列者でしたけど」
彼女のことばがやや泣き声に近くなってきた。
井伊は無言で、彼女の次のことばを待っていた。
「……、溝口さんとは連絡が取れず、参列者のみなさんには、仲人さんの口から、引き取ってもらいました。一度ならず、二度もです。わたしはとても辛くて、泣き崩れてしまいました。とくに二度目はショックから、銀座の職場にもいけない状態に陥りました。3カ月間ほど、お休みさせていただきました」
カトレアのような、すてきな花嫁が結婚式場で泣き崩れる、そうした光景が容易に想像できた。
「婚約者が日夜を問わず事件を追う刑事であれ、理由がいかなることであれ、倫理観に欠ける男だ。結婚式をドタキャンした男だ。挙式にかかったお金を請求して、バイバイ、といえばすむ。証人は２３０人もいるんだから。婚約破棄はなんら労力などいらない。裏稼業の人間にたのむ必要など、さらさらない」
「そうなんですけど」
「憲法で、婚姻の自由は認められている。裏を返せば、結婚したくない相手とは結婚しなくても良い。なにびとも婚約は破棄できる。裁判所は、結婚しろ、という判決を出せない」
「両親からもそう言われています」
「あなたが溝口刑事に、一言、もう結婚はしません、といえば、それで終わり。あいては刑事だ、法的なことはわかっているはず」
「そうなんですけど。そんな単純な話しじゃないんです。溝口さんとは、7年越しの恋です。待ちに待った結婚式でした……」
そこには婚約者への憎しみなどみじんも感じられなかった。むしろ、彼女の目には心底から愛している光があった。

「婚約解消の踏ん切りがつかない。気持ちはわかるが、思い切りも必要だ」
「わたしの口から、婚約解消なんて、とても切り出せません。そんなことすれば、わたしは一生涯苦しむはずです。それが怖くて」
「だったら、両親に話してもらうといい」
「わたしはかつて父が勧めてくれた、青年実業家の男性との縁談話しを断り、溝口さんと婚約したという経緯があります。親にはいまさら婚約解消など、たのめません」
「いっそう。式を挙げずに、入籍し、実質的な結婚をしたら」
「わたしの両親は、親族や世間体もあるし、正式な結婚式が終わるまで、入籍はだめだという、古い考えなんです。とくに母は性格が強くて。そんなことしたら、親子の縁はいっさい切ります、一歩も実家に入れません。あなたはこの家がトラウマだったから、新婚夫婦用に、と先行して買い与えてあげた、いまのマンションも取上げます、と本気で怒られました。わたしは父方の姓を継いでいますから、追い出しやすいんです……」
「親子の縁は切らないほうが良い、どんな窮地に陥っても。人間関係のなかでも、とくに親子関係はたいせつだから」

「わたし辛いんです」
「婚約解消をたのむ相手として、姉は？」
「姉ですか。ムリです。……あきれた婚約者ね、どこが良いのよ、安月給の刑事でしょ。３度目の結婚式はもう私、出ないからね。こっちまで恥ずかしいから。そんなふうに突き放されています。わたしと違って、活発な姉ですから」
「このさい婚約者の上司に相談して、婚約解消の労をとってもらうといい。結婚式に現れなかった刑事だ。署長も理解をしめすと思う」
「溝口さんにも、いろいろ事情があるんです。それを想うと、私から一方的に婚約破棄するとはいえません。だから、辛いんです」
彼女の苦渋の顔をみていると、相思相愛の男女を切り裂いていくような、妙な気持ちにさせられた。
「婚約者の溝口さんは、どこの署にいるの？」
「本庁の捜査一課にいます」
「エリート刑事か」
かれはおどろきの口調でいった。
「溝口さんはエリートじゃありません。係長です」
「30歳で本庁捜査一課の係長とはすごい」
「本人はいつも、刑事畑は自分に合っていない、といっています」
「それは謙遜じゃないのかな。有能だから、本庁捜査一課に挙

がっているはずだ。ところで、階級は？」
「警部です」
「ほう。30歳で警部か。本庁捜査一課の係長、階級は警部、超エリートじゃないか」
「溝口さんは陰では、お客さん、お荷物さん、とあだ名されているそうです。ドジな刑事みたい」
「ドジ？　たとえば、過去に犯人をみすみす見逃してしまった。殺人犯が逮捕されたら、一度は溝口刑事に職務質問されていたとか」
「それは聞いていません」
　ケイタイ電話が鳴った。表示番号は鬼頭からだった。
「布施さまと会えたのか」
「住まいはやっと見つけだしました。アールスメロンは3つとも、腐っていたそうです」
　井伊は横目で、布施和香奈の顔をみた。彼女は、ウソよ、という表情だった。
「それで、どうした？」
「代金は受け取ってくれません。もう、二度とセーフティーで買物はしない。それ一点張りです」
　というと、彼女は首を横に振り、これから贔屓にするという表情をみせた。
「そうか。だめだったのか。せっかくの上客だったのに」
　鬼頭の落胆が伝わってきた。
「なんど詫(わ)びても、だめでした」
「わかった。いますぐ店に帰って来い。店内の全商品を徹底(てってい)してチェックだ。品質、賞味期限、すべてだ。池袋まで45分もあれば、帰れるはずだ。わたしには他に用があるんだ。2時15分には仕事の引継ぎだ。わき道などするな」
　一歳年下の鬼頭が威圧(いあつてき)的な態度でいった。
「これから、すぐ帰ります」
　井伊は電話を切ると、聞いての通りだ、と布施和香奈にいった。
「わたしの話を聞いてもらえないんですか。溝口さんがなぜ結婚式に出られなかったのか、お話したいことがあります……」

「身上相談はいい加減な気持ちで、聞けない。日を改めて、聞かせてもらう。おれが休みの日にでも。茶室でゆっくり」
「わたしは明日から、勤務先の画廊で、展示の切り替えがあります。こちらから都合の良い日を連絡させていただきます。お茶席も設けさせていただきます」
「ひとつ確認しておきたい。親子で苗字がちがうが、あなたには

この屋敷とか、資産とか、その相続権はあるのかな？」
井伊はあらためて敷地全体を見渡した。
「はい。法律的にはあります」
「それなら、さきに婚約解消の決定的なことばを伝授（でんじゅ）しておく。溝口刑事に、『財産狙いの結婚でしょ』という一言いえば、それですむ」
「えっ。それって、溝口さんが気の毒。かれの本心じゃないわ」
「目的達成のためには、同情は禁物だ。勇気をもって一回いえばよいことだ。ストレートパンチで、すべてが終わりになる」
このストレートな発言は、溝口刑事と彼女との間で、厄介な問題とか、事件とかを巻き起こす。そんな予感すら憶えた。
今この場で、その言葉はやめておきな、と取り消すべきか、翻（ひるがえ）すべきか。そう迷いながらも、かれの足はすでに庭門のほうへとむかっていた。

（つづく）

写真協力・奈良美和さん（コーチ／コミュニケーションアドバイザー）

【協力者は本文といっさい関係ありません】